『おそろい兄妹　～メイとマイ～』（体験版）

序　おねんね部屋

八月。関東を襲う猛暑の波は、いよいよ増すばかりであった。

「失礼しまーす」

家具店の新米配送員である若山は、本日中に配送予定の家具を積んだ小型トラックを操り、調布市内の高級住宅街にやって来ていた。配達先と荷物番号を確認し、「大槻」の表札がかかる家の前にトラックを停めると、大槻邸の門扉脇にあるインターフォンを鳴らしておとないを入れた。

「すいません、〇〇家具です。ご注文の商品を、お届けに上がりました」

「あら、どうも。ただいまお開けいたしますから、どうぞお上がり下さい」

出迎えたのは、おっとりとした笑顔が魅力的な婦人だった。外見年齢は三〇前後だが、柔らかい物腰と生気に満ちたオーラが、彼女をさらに若く見せていた。

「ただいま、持って参ります」

若山はマニュアル通りに、荷台から段ボールを運び出し、大槻邸にあがりこむ。高校卒業前に免許を取り、家具店の配送員になって二年。まだ二〇歳になったばかりだが、仕事にもだいぶ慣れていた。

玄関先には花瓶とタペストリ、足元には毛足の長い絨毯が敷かれ、汚れ一つ無い壁にはオーク製の額縁に入れられて、「晩鐘」のエッチングがかかっている。あまりにも綺麗な空間で、１ＰＰＭの生活臭も感じ取ることはできなかった。

壁にぶつけて傷をつけたら大変だ、などと考えながら、

「綺麗なお住まいですね」

「いえいえ、とんでもない。汚いところで、お恥ずかしいですわ」

「商品は、どちらのお部屋までお運びいたしましょうか」

「ええと、こちらまでお願いいたします」

「かしこまりました」

通されたのは、一階奥の八畳間。ドア正面には表通りに面した大きな窓があり、ピンクの壁紙にイチゴ模様のカーペットなど、ファンシーな内装だ。

床にはオムツ交換用のマットが敷かれ、隅の箱にはにぎにぎやオモチャなどが入っている。さらにはオムツポットや、角が丸く削られているクローゼットまでおかれていた。壁の一面に大きな鏡が張られているのが奇妙だったが、一見して、赤ちゃん――それも女の子の赤ちゃんのために調えられたと判る部屋だった。

いや。ただ一つ足りない家具がある。

若山はその部屋の中央に、担いできた段ボールをおろした。梱包を解き、そこからいくつものパーツを取り出す。大きな折りたたみ式のマットレス、そして形も大きさもバラバラな、たくさんのアクリルパイプ。

若山は大槻夫人を振り返り、

「それではこれから、商品の組み立てをおこないます。どちらに設置すればよろしいでしょうか？」

「そうね。部屋の真ん中に、お願いしようかしら」
「了解しました。ただ――」
若山は部屋の一面に設置してある鏡を見て、
「鏡のすぐ横に置かれますと、お子様によっては泣き出したり、嫌がったりする場合があります。ですから鏡の前には、設置しないことをお勧めいたしておりますが……」
「構わないわ。鏡を見て泣き出すような年でもないもの」
大槻夫人の自信に満ちた口調に、若山は一瞬違和感をおぼえる。だがすぐに、
「了解しました。では、設置を始めます」
「お願いするわね」
若山は余計なことを考えずに、ベビーベッドの組み立てにかかった。まずは骨組みとなる脚を組んだ後、床から五〇センチほどの位置にベッド板を固定する。さらに、ベッドの三方を覆うように、パイプで柵を作ってやり、残る一方も蝶つがいで固定する。おむつを替えるときなどは、この可動式の一方を開けば、赤ちゃんを寝かせたままオムツ交換ができるようになっているのだ。
ベビーベッドの組み立ては完成するまで、三〇分とかかっていない。社内では新米扱いとはいえ、一年もやっていればこのくらいあっという間だ。
「まぁ、早いですわね」
「ありがとうございます。以上で、ベッドの組み立ては完了いたしましたが、いかがでしょうか」
「ええ、大満足ですわ。本当にどうも、ありがとうございますね」
若山は安堵して、梱包材の片付けに入った。
大槻夫人は頬に手を当てて、
「ずいぶんしっかり組み上がってるものですね。大人でも、寝られそうですわ」
「ええ。特にこちらの商品は、大きなお子様でもご使用いただけるよう、頑丈に作られています。一〇キロくらいのお子様が暴れても、ある程度であれば大丈夫ですし、寝転がるだけでしたら、大人の方でも充分支えられますよ」
「まぁ、それならうちの子でも、充分寝られますわね。さっそく、寝かせてあげてもいいかしら」
「ええ」
けっこう大きい子なのかな、と考えながらも、若山は深く気にもせず梱包材の片付けを続ける。
その間に、大槻夫人は部屋を出ていった。そしてすぐに戻ってくると、
「ほら、マイちゃん、見てごらん」
彼女は一人の子供を抱きかかえていた。身長は八〇センチくらいで、丸襟のブラウスと、可愛い水色のサロペット風ロンパースを着ていた。腰回りのフリルの下から、ふっくらとしたお尻がのぞいていて可愛らしい。短い髪を水色のボールがついたヘアゴムで結い上げ、口元には、おしゃぶりを咥えていた。
「お嬢さんですか」
「ええ、マイちゃんです。ほらマイちゃん、メイちゃんのベッドですよー。こっちのお兄ちゃんが、組

み立ててくれたんだって。すごいわねー」
「うー、うー」
人見知りはしないタイプらしく、女の子はくりくりとした目で若山を見つめた。若山は笑みをこぼして、
「どうぞ、ベッドは組み上がりましたので、さっそく寝かしてあげてください」
「いえ。そのベッドは、マイちゃんのじゃありませんから。こちらの、メイちゃんのベッドです」
大槻夫人は何気なく言って、背後の足元を振り返った。
若山もつられて彼女の視線を追い――
そのまま、絶句した。
部屋の入口にはいはいしてやって来た「赤ちゃん」は、身長一七〇センチほどもあろうかというほど大きかったのだ。
着ているのは丸襟ちょーちん袖のブラウスと、ピンクのサロペット風ロンパース。つまり、大槻夫人の腕に抱きかかえられているマイが着ているのと、まったく同じデザインのものだ。
ただしサイズと、色が違う。その「赤ちゃん」が着ているロンパースはピンク色で、小さいマイが着ているものよりもさらに女の子らしい印象なのだ。ヘアゴムも、おしゃぶりも、マイとまったくおそろいで、こちらもピンク系で統一されている。おしゃぶりは赤ちゃん用のものを使っているのだろうが、サイズが合っておらず、違和感を強調している。
「どうです？　作った自分がいうのも何ですけど、可愛いお洋服でしょう？　こっちのマイちゃんと、みんなおそろいで作ったんですよ」
大槻夫人の高らかな声に、若山は答えることができなかった。あまりにも現実離れした「赤ちゃん」に、ただただ目を丸くするばかりだ。
むろん「赤ちゃん」のほうも、若山の驚愕に気がついている。真っ赤になって眼を閉じると、おしゃぶりを噛みしめてうつむいた。
それをおかしげに見おろした母親は、
「メイちゃん、ご挨拶なさい。こっちのお兄ちゃんがね、メイちゃんのベッドを運んで、組み立ててくれたんでちゅよ？」
大槻夫人は、「赤ちゃん」の口からおしゃぶりを外した。おしゃぶりからよだれの糸が光ってブラウスにしみをつくり、「赤ちゃん」の口元も、よだれでべとべとに汚れていた。
この「赤ちゃん」の身長から考えれば、少なくとも高校生くらいにはなっているだろう。高校生にもなってあんな服を着せられ、母親から口に付いたよだれをよだれかけで拭き取られるのは、一体どんな気持ちだろうか――若山はぼんやり考えた。
「さ、綺麗になったところでご挨拶よ。ほら、お兄ちゃんの顔を見て」
「……」
しかし「赤ちゃん」は、文字通りに真っ赤になって唇を噛むばかり。まったく、口を開こうとしない。

その空気に耐えきれず、若山は口を挟んだ。
「え……あ、その、ええと、娘さんですか？」
いささか間の抜けた質問だったが、聞いたとたん、「赤ちゃん」は泣きそうな顔になった。
何かまずいことを言ってしまったのだろうか。そう思って心拍を早める若山の耳に、大槻夫人の世にもおかしげな声が聞こえた。
「いえ、娘じゃありません。息子ですわ」
彼はふたたび絶句した。
「ごめんなさい、驚かせてしまったわね。ほら、メイちゃん。挨拶もできないなんて、本当の赤ちゃんじゃないんだから。ご挨拶もできないような子は、おまんま抜きよ？」
「っ！」
メイの顔が、悲痛に引き歪んだ。しかしやがて顔を上げ、若山を見上げる。
「あ、あー……」
まるで赤ちゃんのように拙い言葉が、その唇から漏れた。
彼の口の中には特殊な器具が入っていて、舌の根本を固定している。そのため、まるで赤ちゃんのようにぎこちない声しか出せないのだ。自分の声の情けなさを羞じながら、それでも命は必死に「ご挨拶」をする。
「おーちゅき、めい、でちゅ。とちは、はたちでちゅ。おにーたん、メイの、ベッドを、はこんで、くえて、ありがとうごじゃいまちた」
俺と同い年だ――若山の全身に、鳥肌が立った。自分がこんな状況になったらと考えるだけで、全身の体温が奪われるような寒気を覚える。
「あ、う、うん。どういたしまして」
若山は、メイから視線を背けていた。動揺の残る声で、
「ええと――それでは商品の組み立てサービスは以上になりますのでこれで失礼させていただいてよろしいでしょうか」
「ええ、ありがとうございます。……さ、メイちゃん、ベッドに行きましょうねー」
母親は再び、メイの口におしゃぶりをはめる。そして小さな舞を抱えたまま、メイをベビーベッドに誘導した。
メイは泣きそうな顔で、カーペットの上をはいはいする。やがてベッドの下まで辿り着くと、彼はベッド見上げてよじ登った。身長があるため、その気になれば立ち上がって寝転がることはできるのだが、どうやらそれは許されていないらしい。あくまで肘と膝を使って、よちよちとのぼることしかできないのだ。ぎしぎし、とベビーベッドが軋む。
ベビーベッドの上にごろんと仰向けになると、さすがに狭い。縦の長さが一五〇しかないのだから、

両脚を縮めなければならず、かなり窮屈だった。両手はまるで赤ちゃんのように、肘を折り曲げ、肩の横あたりで小さく万歳するようなポーズをとる。

「うんうん、大丈夫みたいね」

大槻夫人は息子の姿を見て、嬉しそうにうなずいた。ベッドに近寄ると、これまで開いていたベビーベッドの柵の一方を動かし、完全に、メイを取り囲む状態にする。

四囲の柵が完全に閉じられる瞬間、メイは絶望的な、すがるような目で母親を見上げた。しかし母親は容赦なく、まるで牢獄のような柵は、音を立ててメイを閉じこめた。

「ふふっ、これで、おねんねの時も安心ね。ほら、見てごらんなさい。ベビーベッドの中にいるメイちゃんは、とっても可愛いわよ?」

メイはぎゅっと眼を閉じた。すぐ横手の壁には、大きな鏡が張られている。もしも横向きに寝たら、赤ちゃんのようにオムツをあて、赤ちゃんのような服を着て、ベビーベッドに寝ている――その現実を、否が応でも突きつけられる構造になっていた。

まして母親の腕の中では、自分とほとんど同じ格好の小さい妹が、見おろしているのだから――

若山はメイの心中を察して、ぞっとした。これ以上、この家に長居したくはなかった。

「そ、それでは失礼します」

と震える声で言い、梱包材を両手に抱えて立ち上がったときだった。

ちょろちょろとちいさな水音が聞こえ、その直後、

「ふぇ……」

大槻夫人の腕の中にいる舞が、不安げな顔になった。くしゃりと顔が歪み、泣き出しそうになる。大槻夫人はすぐにその理由を察して、

「まぁまぁ、マイちゃん、ちっちだしちゃったの? いい子いい子、すぐに取り替えてあげまちゅからねー」

どうやら小さいマイちゃんが、おもらししてしまったらしい。

しかし同時に、

ピリリリリリリ――

軽快な、しかしどこか不吉な電子音がベビーベッドにいるメイから聞こえ――今まさに部屋のドアに手をかけようとしていた若山は、思わず脚を止めて振り返った。

振り返った彼が見たのは、ベビーベッドの中で顔を引きつらせている大槻メイの姿だった。何かくすぐったさをこらえるような表情で、じっと硬直している。メイは必死に悲鳴を押し殺していたが、

「むっ、んんっ、んっ、んぅっ……あ、あ、ああっ……!」

メイの口から、遂におしゃぶりが転げ落ちた。開いた口から虚ろな悲鳴をあげて、手脚を痙攣させる。その間にも、メイから――正確にはメイのオムツの中から聞こえる電子音はいっそう大きくなる。それ

につれてメイの顔はよりいっそう赤く染まり、メイの口からこぼれる悲鳴と、喘ぎ声は、いっそう高まっていく。

そして、遂に――

しゃあああああっ……

今度は耳に聞こえるほどの水音が、はっきりとメイのオムツの中から漏れ、静まりかえった部屋の中に響き渡った。いったい何が起こったのか、説明されるまでもなかった。

「あらあら、メイちゃんも、おもらししちゃったのね。マイちゃんと一緒におもらししちゃうなんて、二人とも本当に、仲良しなのね」

大槻夫人が、説明くさいせりふを言った。それは若山に説明しているというよりも、メイに向かって現実を突きつけ、いっそう辱めるための言葉のようだった。

「うっ、うぅっ……」

やがて電子音が止まり、さらに水音も止まる。

あとに残ったのは、メイの啜り泣く声だけだった。

大きな図体の「赤ちゃん」は、見た目通りの少女のように嗚咽し続けていた。